

Title	性暴力被害を経験した女性たちの沈黙に関する現象学的研究
Author(s)	井上, 瞳
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96189
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (井 上 瞳)

論文題名 性暴力被害を経験した女性たちの沈黙に関する現象学的研究

論文内容の要旨

本論文の目的は、トラウマを専門とする心理士が主催する性暴力被害者支援グループに参加している女性たちを対象として、彼女たちが現代の日本社会においてどのように沈黙を経験しているのかを明らかにすることである。その際、本論文では、彼女たちが支援グループを含め、精神医療、心理臨床、カウンセリングなどメンタルヘルスを中心とした支援機関にアクセスしている事実を周囲の人々に言わないまま社会生活を送っている点に注目することで、当事者が経験する沈黙のリアリティおよび沈黙を課す日本の社会的状況を明らかにする。

性暴力被害を経験した女性の沈黙は、「語ること」で回復を目指すに従来のトラウマ研究において、主にPTSDの深刻化および回避といった症状の水準で捉えられてきた。そこでは、当事者にとって沈黙がどのようなリアリティで捉えられ、経験されているかは必ずしも明白ではない。

本論文では、①社会生活において沈黙がどのように経験されているのか、②そうした状況に対して当事者がどのように応答しているのか、③性被害について明らかにすることが難しい社会の中で当事者がどのように支援機関へのアクセスを実現しているのかという三つの問いを主軸に、7章の構成をとって以下の通り考察を進めた。

第1章では、まず、本研究に直接関係する性暴力被害者支援に関する精神医学・心理学的研究および性暴力被害者支援に関するジェンダー研究という二つの領域を中心とする先行研究を検討し、これらの研究における二つの問題点、1.トラウマを中心とする精神医学・心理学的研究における議論が、沈黙を「症状」の水準に縮減してしまう恐れがある、2. 医療化を評価しつつ、「語ること」における専門家と当事者の間の関係の非対称性に着目したジェンダー研究における議論が、沈黙を専門家による抑圧の帰結とみなすことで精神医学・心理学的研究と同様の図式を採用していることを指摘した。またその背景には、沈黙に外側からアプローチする傾向があったことを指摘し、現象学的な質的研究の手法を用いて沈黙に内側からアプローチすることで課題の乗り越えを目指した。

第2章では、調査の概要を示した。具体的には、本研究が実施したグループインタビュー（全4回）の調査の概要およびグループインタビューの実施に至った経緯を示した。

第3章から第6章では、第1章での問題提起を受けて、第1回～第4回のグループインタビューで得た語りと参与観察の結果について、現象学的な質的研究の手法を用いて分析を行った。

第3章では、当事者が社会生活においてどのように周囲の人々と関係性を構築しているのかを分析した。その際、当事者の視点の内側から沈黙にアプローチすることで、性被害について語る事が難しい社会生活において沈黙が他者との関係性を構築する「実践」として遂行されていることを論じた。

第4章では、第2回グループインタビューに依拠しながら、社会が当事者に沈黙を課すメカニズムを分析した。ここでは既知の加害者だけでなく、匿名的な世間の存在が、性被害について語る事や話す事を困難にする経緯について論じた。

第5章では、第3回グループインタビューに依拠しながら、そうした状況に抗して、当事者がどのように支援機関へのアクセスを実現させているかを分析した。支援機関へのアクセスを当事者の視点から捉えることで、精神症状の軽減といったポジティブな側面に尽きない影響について論じた。

第6章では、第4回グループインタビューに依拠しながら、当事者の内面的な視点に「世界」がどのように立ち現れており、その中でどのような主体性を発揮しているのかを分析した。ここでは、支援機関へのアクセスの場面に着目することで、従来の研究における議論の射程の外に置かれてきた支援機関へのアクセスに際して当事者が発揮する主体性を詳細に記述した。

第7章では、これまでの論述のまとめを行った後、当事者の当事者の視点から沈黙がいかに経験されているのかに関する本論文の議論を、第1章で論じた性暴力被害者支援に関する先行研究との関係で、1. 当事者の沈黙を「語りの不在」に回収するのではなく、社会生活において他者と関係性を構築する「実践」である、2. 沈黙を「実

「実践」の観点から考察することでトラウマインフォームドケアとの接続可能性について考察を加え、総括を行った。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (井 上 瞳)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 村上 靖彦
	副 査 教授 白川 千尋
	副 査 教授 野坂 祐子
	副 査 学外委員 松嶋 健 (広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授)

論文審査の結果の要旨

井上瞳氏の博士論文「性暴力被害を経験した女性たちの沈黙に関する現象学的研究」は性暴力被害を経験した女性たちがつどうピアサポートグループでの6年間という長期間に渡る参与観察及びグループインタビューをもとにした、論文である。人類学的なエスノグラフィと現象学的な質的研究の方法を高次で組み合わせることにより、アクセスが難しい当事者の声に深く入り込んだ記述を行い、従来優勢だった精神医学・心理学の視点からの性暴力被害者についての言説では盲点になっていた、家族にすら被害について語らないなかでの当事者の生活、サポートのないなかでの支援へのアクセス、心身の不調と就労支援が不在であるなかで自力で就労への道筋を探る実践というさまざまな側面を浮き彫りにし、最後には実践的な示唆も与えるものになっている。

まず先行研究の検討が、1. 性暴力被害者支援に関する精神医学・心理学的研究 2. 性暴力被害者支援に関するジェンダー研究としてなされる。これ自体はコンパクトであるが、すでに学会誌で査読付き論文として発表されたレビュー論文を下敷きにしたものであり、著者が十分な先行研究の検討のもとに本調査を始めたことを示している。1980年代にPTSDに関する研究・治療が本格化したのち、外傷を語りださせるが主流の流れになってきたことを指摘する。そのうえで、性暴力被害をめぐる日本の現状においては、スピークアウトに基づいた治療方針が必ずしも機能し得ないことを著者は指摘する。次に、著者は日本ではまだほとんど紹介されていない性暴力被害者支援に関する海外のジェンダー研究を渉猟する。専門家と当事者間の非対称性のもとで、語ることの可能性が設定される環境と、そのことが語ることを過度に重視する治療技術と密接にリンクしていることを論じたネイブルズやバーストウの議論を紹介する。そのあと、医療人類学者によるレイブクライシスセンターなどでの調査研究を参照し、ムラの「被害者の顔は「被害者の正しい顔」に、身体は「証拠としての身体」に縮減される」「法的物語・治療的物語をこぼれる病院の外の「被害者と家族の生きられた現実」に関する語りは捨象される」といった指摘をとりあげて、医療のシステムにおいて排除抑圧される当事者を浮き彫りにする。しかし同時に、井上氏は、これらの研究が被害者の「沈黙」をネガティブなものへと押し込める結果に陥っているという点を批判として提起する。支援ではない生活そのものに注目したこの問題設定自体、性暴力の研究士において極めて斬新でありかつ実践的に大きな価値をもつものである。

これらの文献検討とその批判をもとにして、沈黙のなかに、性暴力被害者自身によるサバイブするための積極的な「実践」があるのではないかという問題設定を試み、その問いを考察するために、支援者のファシリテートのもとに性暴力被害者が集うピアグループの参与観察を行い、かつピアグループメンバーの自由参加による4回のグループインタビューを試み、逐語録を現象学的な質的研究の方法で分析している。以下、著者によるまとめをもとに調査概要を示す。

まず第3章では第1回グループインタビューの語りと参与観察を通して、当事者が周囲の人々との生活の中で沈黙を通じて他者との交渉を行っていることを明らかにした。当事者にとって、支援グループは性暴力被害者支援を目的とする点において、性被害と同じく社会生活においては「語りえない／言えないもの」の系譜に連なっていた。性被害について語りうる／言いうる支援グループの存在意義は大きい。しかし、グループについては社会生活においては語るができない。その存在意義をも転覆させたインタビュー終盤の語りは、内在的なパースペクティブの極地、言い換えれば〈一人称の世界〉に立ったときに初めて視界に入る世界、すなわち性被害が起きてしまったこの世界に対置される〈性被害が起きなかったはずの世界〉を示唆することを、著者は示している。

第4章では、第2回グループインタビューに依拠しながら、世間が当事者に沈黙を課すメカニズムが解明されている。警察官など公権力を持つ人々と対峙する公的領域だけでなく、家庭のような私的領域を含む「世間」において、当事者は世間を「匿名的な恐ろしさ」として感知し、性被害について「言わない」道と、既知の加害者と対面しない道を選択するが、これは加害者ではなく被害者を抑え込む世間において生きる。これを井上氏は「実践」と位置づけて、再解釈し直している。公的領域ないし私的領域において「言う」道を選択した当事者は、いずれも空間および関係性からの排除を余儀無くされることが明らかになっている。生活と支援のあいだはさまざまなねじれを含んだ仕方でのみ接続することが綿密な分析で明らかになる。

第5章は、それら状況に抗して支援機関にアクセスする当事者の実践を扱った部分であった。ここでは、第3回グループインタビューに依拠しながら、支援機関へのアクセスが「しんどさ」を精神症状とみなしながら軽減する一方で、同時に当事者を両親や子ども、友人といった周囲の人々との関係性、および支援機関のネットワークから排除する危険性を含んでいることを明らかにした。以上、沈黙を捉えるには当事者の一人称のパースペクティブに立つ必要があること、周囲の人々との関係性や世間において生きるための「実践」——もつとえば排除されないための〈実践としての沈黙〉——があること、その意味で支援機関へのアクセスが社会からの排除の危険性と表裏一体の関係であることが明らかにされた。

第6章は、ここまでのグループインタビューの全体の流れをメンバーが捉え直した第4回グループインタビューを扱った。第3章および第5章でも指摘したように、当事者の一人称のパースペクティブには、性被害が起きなければありえたはずの世界が認められる。その中で、当事者の主体性および能動性とは、ありえたはずの世界を抱えながら、性被害に遭ったこの世界において「どのように生きていくか」を問い、かつ、伴走者不在のままひとりきりで支援機関を選ぶことが示された。そのなかで当事者たちは困難な選択を繰り返し行い、「私たちは支援を受けたことがない」とまで言われる。以上の研究の結果、むしろ伴走型支援、就労支援の仕組みが整っている、加害者臨床のほうが支援が進んでいる側面があることをしてきし、今後の性暴力被害者支援に対して大きな示唆を与えている。

この調査研究は、性暴力被害者たちが、どのように生活のなかで家族にも被害を沈黙しながら生活・治療・様々な支援・就労へとアクセスしているのか、その戦略がいかなるものなのかを詳細に、そして多様な仕方ですすものであり、類例がない研究結果である。学術的に重要な成果であるだけでなく、社会的にも大きな意義のある結果であり、博士（人間科学）の授与にふさわしいと判断された。